

「不思議語りが残したもの～スピーチのレベルアップに関する考察」

甲南女子大学日本語日本文化学科講師 原 良枝

1 はじめに

「アナウンス入門」「視聴覚コミュニケーション演習Ⅰ、Ⅱ」、「視聴覚コミュニケーション実習Ⅰ、Ⅱ」というアナウンス系の授業を3年間担当した中で、学生の成長を如実に感じられたのはスピーチにおける伸びである。それぞれの授業で、多くの時間をスピーチに費やした。特に2019年度「アナウンス入門」後期履修生の上達ぶりは目を見張るものがあった。

このノートでは、特に2019年度後期の「アナウンス入門」をとりあげ、なぜスピーチ能力が上がったのかについて考察をしていくこととする。

2 「声」の意識化

「アナウンス入門」は、声での表現を意識化する授業である。小学校、中学校、高等学校における国語科の授業では「音読」「話し合い」時には「ディベート」そして自己紹介や課題発表という口頭での表現を扱い指導が行われている。重視されるのは、(指導教員の音声言語への関心にもよるが)多くは話される内容そのものや話の構成、発言のタイミング等である。音声での表現である以上は「声」が重要である。しかし、声を使った技術や表情、話し方等「外見」的な要素についての指導はほとんど行われていない。指導する教師がそのような「外見」的な技術を教員の養成課程で教授されていないため、授業内で指導をなかなか行えないことも理由の一つである。技術的なものは低位に見られてしまう。しかし、発表やスピーチなどが内容的には評価の高いものであってもそれを伝える声が届かなければ内容も届かない。逆に言えば、声による表現が豊かであれば、聞き手の聞く姿勢は保たれ、ともすれば内容以上の評価を得ることさえある。外見的な技術は音声表現である以上、決して軽い扱いであっていいはずはない。

したがって大学入学までに授業では扱われてこなかった(演劇部や放送部に属していた生徒以外)発声法や基本的な声の表現技術、表情や姿勢の在り方などを身体表現として意識的に取り扱う「アナウンス入門」は、これからの人生を生きていくために必要なスキルを学授業であると受け止めている。

言葉の力とはよく言われることであるが、言葉の力は話し言葉において「声」の力により増幅できる。実際のところ、日常生活において誰もが声の力を生かしながら会話をしている。人に何かを懇願する時、楽しい時、悲しい時、怒りに震える時、辛い時、声は心の状態伝えている。聞き手は話し手の声の表情と態度と内容がかみ合わず違和感を覚える時、その話を信じられないとジャッジし聞くことを放棄する。この時、内容は伝わらない。台本のない日常会話であれば人は伝えたい気持ちを持ち、伝わる

ように考えながら話す。ところが、パブリックスピーキングになると、本人が書き上げた原稿をもとに話をする時でさえもこちなくなり、内容から声が乖離してしまうような事態に陥る。多くの人が経験していることである。

お喋りは好きだが、パブリックスピーキングは苦手という多くの日本人の特性は今更特筆すべきことではない。パブリックスピーキングにおいて、話の内容が素晴らしければ伝わるという消極的な話し方ではなく、どのような内容でも聞き手の関心をまず取り込むような「話し方」を目指すことが重要であろう。それには、「声」の意識化と「音声言語表現技術」の学びが必要である。

そのために、まず、声の情報の在り方を意識化させていく。自分はどのような話し方をしているのか、話し方にどのようなくせがあるのか、姿勢や表情、身振り手振りといった非言語コミュニケーションは適切か。これらを客観視することから始め、声による表現と身体表現の重要性を意識させていく。

同時に「音声言語表現技術」についての理解を行う。「アナウンス入門」の授業においては「音声言語表現技術」として、①アクセント②イントネーション③句読（文の切れ目は意味の切れ目であり、文章中の読点にとらわれる必要はない）④声の大小・強弱、読みの緩急等⑤ポーズ（チェンジオブペース）を説明し、実際の読みやスピーチを通して理解させる。

加えて、これらの技術を実際の文章に合わせて論理的に駆使できる場を用意する。ここでの読みの練習は、読みを上達させるためのものではない。読みとスピーチの連動性を鑑み、まずは読みで音声表現技術を意識させ、スピーチへ反映させていく手段の一つと考えている。パブリックスピーキングは、慣れることで上達していく傾向がある。やみくもに慣れさせるのではなく、15回の授業内で最大限に力を伸ばすための授業の工夫も問われてしかるべきで、その工夫として読みを取り入れていることを強調したい。

3 パブリックスピーキングにおける呪縛からの開放

最高レベルのプレゼンテーションとして認識されている『TED』トークについて、脳科学者の茂木健一郎氏は、『TED』トークの時代は終わったと指摘している。茂木氏は以下のような発言¹をしている。

「『TED』の特徴の一つは、厳密に構成されたトークです。ジョークで聴衆を温めて、計算通りに導いていくスタイルです。『TED』はたしかに革新的でしたが、いまはさらに一歩進んで、ポスト『TED』の時代になった気がしています。」そして、「演出や構

¹ 「PRESIDENT」茂木健一郎が解説 楽しい会話 イラつく会話 21頁 2019. 12. 13号 プレジデント社 2019

成もなく、いきなり実質的な話題に入るのがポスト『TED』であり、いまはそのほうが人を引き付けると思います。」と述べている。茂木氏は、16歳の環境活動家のグレッタ・トゥーンベリの名を挙げ「彼女は、国連でもダボス会議でも、原稿を読みながらスピーチしていました。原稿を読むなんて『TED』では考えられないことです。でも実質的なことだけを飾らずに話すから、ヘタに演出するよりずっと説得力があります。」と述べている。

茂木氏が指摘した「演出や構成もなく実質的な話題に入るスタイル」、「原稿を読みながら飾らずに話すスピーチ」について私見を述べていきたい。

今から25年ほど前に作家の落合信彦氏の講演を聞いたことがある。落合信彦氏の講演はまさに前者の話し方であった。挨拶もジョークもなく、実質的な話題にすぐに入った講演スタイルは、落語の枕のように簡単な挨拶から軽い話題へ移り、本題へ移行するという従来からの話の構成パターンを逸脱するものであり、驚きと斬新さに目を見張った。落合氏の講演は、世界情勢がテーマであっただけに、会場は一言も聞き漏らしてはならないというような緊張感に包まれていた。もちろん落合氏は原稿やメモも一切手にしていなかった。プロンプターもない。講演という長い時間であるからこそできたことかもしれない。しかし、話の構成や話し方という話のスタイルは、決められた流れを踏襲するだけではない個々にあったスタイルがあるのだという事を強く感じた。「起承転結」で構成する必要もないのだ。学生たちには、「スピーチやトークについてこうでなければならない」という漠然としたある種の呪縛があると感じられる。その呪縛を解くことが重要であろう。

呪縛として挙げられるのは、「立て板に水のようにスラスラペラペラ話すこと」、「原稿やメモを見ずに前を向いて言いよどむことなく話すこと」等に代表される。つまり、綺麗にまとめ上手に話すことがスピーチには求められるという認識である。これはスピーチに限らず、音読や朗読にも当てはまる。間違えてはいけない、言い淀んではいけない、スラスラ綺麗に上手に話さなければいけない、という呪縛だ。これらの指摘は学生たちの相互評価や、自らのスピーチの振り返りの際に挙げられている。

「メモや原稿を見ずに話した方が良い」「考えながら話すのではなくスラスラ話したかった」「話の途中でつかえてしまい続かなくなった」等の指摘が授業後のリアクションペーパーに多く見られる。その上で「もっと上手になりたい」とレベルアップを望むコメントが続いていく。学生たちはどういうレベルが上手で、自分もその状態になりたいと思うのか、授業開始の当初はそれがわからない。日本の場合、身近で手本になるようなスピーチになかなか出会えないため、スピーチに対するイメージが希薄なのだ。スピーチやパブリックスピーキングや読みについてなんとなく曖昧な感じを抱いてはいるが、自分が行う場合に実際どうすればよいのかわからないというのが現状である。

「メモも何も見ずによどみなくスラスラ話すのが良いスピーチ」であるという呪縛を解かなくてはならない。そのためにまずは、原稿やメモを見ても良いし、全文原稿を書いて読んでも良いと伝える。学生たちに驚きの表情が浮かび、やがて安心の表情に変わる。

次に以下のようなアドバイスを繰り返し行っていく。

- ・自分の話し方やスピードを生かし、間違えたら言い直せばよい。
- ・他の人のスピーチの良い所を真似してみる。
- ・鏡を見て練習をする。
- ・自分の声と話し方を録音して聞いてみる。
- ・ドキドキするのを怖がらなくても良い。それは集中している証拠。
- ・まずは皆の前に立ったら場を見渡し一息入れる。
- ・慣れれば誰でもできるようになる。

このようなアドバイスを繰り返し伝える。初めはおどおどしながら壇上に立ち、うつむき加減で声もか細かった学生のほとんどが、15回目の発表では前を向いて声をだせるようになっていく。

しかし、「スピーチやパブリックスピーキングはお喋りの延長であり、なんとか笑って笑顔で誤魔化すこともできる」という意識ものぞく。長い講演よりも短い3分間スピーチの方が如何に難しいかはスピーチの名手が語っている。しかし、学生たちは、単純に短い時間だから準備せずともその場でできるだろうと考えてしまう。当然のごとく準備せずに行ったスピーチは、聞いてもらえないことに気づく。自分でも情けなくなる。ここでスピーチが怖くなり、嫌にならないようフォローすることが大切だ。良い所を評価し、工夫できる点を指摘する。しかしそれ以上に効果的なのは、学生たちによる相互評価だ。相互評価を繰り返すことで、お互いの気づきが共有されていく。このような時間を重ねていくうちに、準備されたスピーチとそうでないスピーチの違いも見えてくるようになる。この時が学生たちのスピーチのレベルが一段上がる瞬間であり、スピーチに対する呪縛が少しほぐれた段階といえるであろう。

呪縛がほぐれ自由にスタイルを模索し始めると、見違えるような生き生きとスピーチが飛び出してくる。茂木氏の指摘した「演出や構成もなく実質的な話題に入るスタイル」、「原稿を読みながら飾らずに話すスピーチ」が（「TED」スピーチのようにはいかずレベルの差は当然あるが）登場してくるのだ。

4 スピーチのテーマ

「アナウンス入門」でのスピーチの基本のテーマは、「自己紹介」から始まり、「自分の好きなことやものを聞き手の興味を誘うような工夫をしながら発表する」、「社会の気になる出来事」、「言葉について思うこと」、最終試験として「私のお勧め本」である

が、履修人数や進度により全てを行うことができない授業もある。最終テストとしての「私のお勧め本」（漫画を除く）では、本との出会いや関わり、梗概等を述べ、本の中からシーンを選び3分間ほどの朗読を行う。全体として7分くらいの発表を課している。

この課題では、スピーチとその構成、朗読、朗読のシーン設定の説明という、全体的な内容の面と、発表におけるパフォーマンスへの評価の合計を総合評価としている。発表全体のパフォーマンスとは、声のボリュームを始めとした音声言語表現技術の適切な使われ方、聞き手への意識の有無、表情の有無、美しい姿勢の維持などを意味している。これらの発表内容とパフォーマンスを合わせた評価を総合的な評価とするが、ここで重要なポイントとなってくるのが、実は発表以前の準備段階に相当する「本の選定」である。

課題は「お勧め本」としているが、必ずしも本人が一番好きな本ではなくてもよい。紹介しやすい本を選ぶことができるかどうか大きなポイントとなる。しかし、ほとんどの学生はそこまで考えずに正直に好きな本を選ぶ。したがって、好きだからという理由で12巻、20巻というシリーズものの中からの1冊を選んだばかりにシリーズそのもののあらすじを追うことに終始してしまった結果、時間がなくなり、選んだ本そのものの紹介ができなくなるケースや、好きでたまらないという感情ばかりが先走り、内容を正確に伝えられなくなるケースが頻発する。このような結果にならないためにも、どのような基準で何を選ぶのか、本の選定は重要なのだ。発表という目的に対して取り組みやすい本を選ぶことができるか。発表は、本を選定する時点からすでに始まっている。与えられた課題やテーマそのものについて、表層的な解釈にとどまらず、聞かれていることの意味を問い、その真意を読み取ることが求められるということも学んで欲しいことの一つである。

前期に、この意図をくみ取った発表も見受けられた。ある学生は教室の全員が知っているであろう『アンネの日記』をお勧め本として紹介した。周知の本であることから、梗概にさほど時間をかけなくてもよい。その時間を自分の思いや朗読個所の説明に充てることができたため、余裕のある発表という印象を皆に与えることができた。しかし、一方でこのような発表は、聞き手が知らないものを聞くという刺激を削ぐことになると同時に、聞き手の知識に頼るところが多く聞き手に甘える発表であるという誹りを受けるかもしれない。確かに「アナウンス入門」の授業でここまでの考察は学生にとって必要はないとも考えられるが、『アンネの日記』の発表は、「皆が知っている本をどのように紹介するのか」という聞き手の興味が、新しい知識の刺激の享受を上回る発表となり、話し手の学生も「好きな本というより紹介しやすさを優先した」と語っていたことから、今回のスピーチの出題意図をくみ取ることができたと評価した。いずれにしても聞き手の興味をいかに誘うかという点が、スピーチの内容を決め

る要諦であることは理解してほしいところである。

発表に関する傾向として本の選定については一定の傾向がある。「お勧め本」に対するイメージは、教室内の約 9 割の学生が「小説」を挙げる。彼女たちにとって本＝小説というイメージが強い。同じテーマのスピーチを、男子学生のいる大学で行った際には、政治やスポーツ、音楽に関する本が登場しジャンルが多岐に渡ったが、「アナウンス入門」においては、文学部の特性であろうか、本のジャンルは小説に偏った傾向がみられた。

最終発表は各自授業の集大成になるため意気込みも感じられる。前期の授業でも、シリーズ本を数冊持参し実物を手に発表を行った学生や、挿絵を描いて皆に示した学生もいた。このような工夫が後期においてはさらに発展した。紙芝居風に手書きの絵で梗概や主人公を紹介した発表や、物語の世界観を図や地図に表す発表、模造紙に絵を書いて説明を行うというような小道具を制作し視覚を動員しようとした試みがあった。これは、学生同士が互いのよいところを真似しながらクラス全体で発表のスタイルを進化させていった例として大いに評価できる流れである。

この変化は、4 つ目のスピーチ課題から顕著になった。4 つ目のスピーチ課題から学生の取り組み方が積極的になったと換言できよう。そのテーマは「不思議な体験」であった。

5 「不思議な体験」を語る

5-1 細部への心配りを支えるもの

「不思議な体験」を語ることで学生たちのスピーチに対する取り組み方は目に見える形で変わっていった。なぜ、このような事が起きたのであろうか。その理由を探っていききたい。

「アナウンス入門」の授業は音楽教室で行っている。12 人の出席者は椅子を半円形に並べ、その中心に話し手が立つ。ぐるりと 180 度から見られることになる。聞き手一人一人とアイコンタクトがとれる至近距離であり、聞き手と話し手双方の様子が互いによくわかる舞台設定だ。音楽室のため、原稿やメモを譜面台に置く工夫も見られた。扇形の半円ステージは、12～15 人が限度であり、同教室で行った「アナウンス入門」前期は 30 人近くの履修があったため、広いスペースに横に 6 人、縦 5 列の長方形の配置で実施した。話し手も教壇に上がっての発表となり聞き手とは距離感があった。もっとも、このような壇上からのスピーチにも慣れることも重要ではあるが、半円形のステージの方が場の共有意識は高まり、聞き手に話が伝わる感覚と伝わらない感覚がより強く働く利点がある。後期の学生たちは、始めは戸惑いがあったが、3 回目のスピーチくらいからは半円形のステージに慣れ、話しやすさを感じ始めてきた。

この教室には、実に巧みなスピーチを行う学生が 3 人いた。特にその中の一人 S さ

んは（日文の学生ではない）これまで担当してきた学生の中でも内容、パフォーマンス共に突出して素晴らしいスピーチを毎回聞かせてくれた。他の学生たちも彼女の実力を認めており、「Sさんのようなスピーチがしたい」、「真似をしてみたい」という感想が寄せられた。音声言語表現技術による発表は、残酷ではあるが採点スポーツのように好き嫌いは別にして力の差ははっきり出てしまい結果を享受せざるを得ない。それだけに自己の課題が明確化され、それを克服することで成長が実感できる。

授業内では、Sさんが示したメモのサイズとホワイトボードの使い方に多くの学生が共感してそれに倣った。メモのサイズとは、A4の用紙を4分割した大きさのものだ。それまでほとんどの学生は、A4の用紙やノートの切れ端、大きなノートそのものを持っての発表か、メモなしで発表に臨んでいた。メモなしでの発表は評価もできるが途中で忘れてしまい收拾がつかなくなることもある。そこでメモを作るが、A4の紙では目立ちすぎる。Sさんは、片手に収まりさほど目立たないA4用紙を四分割した紙のメモを準備していた。実際にこのサイズにして発表を行い使いやすさを感じていた。

もう1点は、ホワイトボードの上手な使い方である。Sさんは、後ろを向かず半身で話ながら丁寧にホワイトボードに字を書き添えていく。時には準備してきた自作の画や写真を貼りながら説明をする。彼女は塾の教師のアルバイトで指導されたわけでもなかったという。優しい声と話し方も相まってほぼ満点の発表である。Sさんのホワイトボードの使い方を倣い、教室全体のレベルも上がっていった。

メモ用紙のサイズの選び方や、ホワイトボードの使い方はスピーチや発表において些末的なことかもしれない。しかし話し手自身が話しやすい環境を自ら作ることが大切なのだ。このような細部への心配りを完成することが発表を成功へ導く。加えて、メモ用紙のサイズやホワイトボードの使い方について工夫をすることは、「聞き手」の存在を意識しているからこそできる準備だ。ただ話せばよいという独りよがりのスピーチにはない完成度の高いスピーチはこのような細心の心配りがある。このような心配りは、スピーチの練習の積み重ねなしで生まれてくることはない。練習の積み重ねにより初めて気づくことなのだ。練習をしてみなければ、メモの扱いにくさやホワイトボードへの語句の配列やそれを書いていくタイミング等はわからない。細部への心配りは練習の賜物であり、練習をしなければ手に入れられない気づきなのである。

練習を積み精錬されたスピーチは何かが違うと学生たちも気づき始めた。学生のリアクションペーパーには、「スピーチはぶっつけ本番ではうまくいかず、練習をしなければならぬと思いました。」「私も次からは練習をさせていただきます。」という内容の感想が寄せられるようになっていった。最後の発表では、「家族に聴いてもらった」、「恥ずかしいけど、鏡をみて練習してみた」、「ぬいぐるみ並べて聞いてもらった」等の記載があり、申告通りに練習の跡が伺えるスピーチになってきた。

5-2 実際のスピーチ例

4 回目のスピーチのテーマである「不思議な話」は、非常勤講師をしている関東学院大学で学生たちとの雑談をした際、ある女子学生がミステリアスな体験をしたことを実に巧みに生き生きと話してくれたことから、スピーチにも応用できるテーマかもしれないと考え、「アナウンス入門」の学生たちのスピーチテーマとしたという経緯がある。

不思議な体験や聞いた話は人に話したくなるのが常である。日本に限らず世界各地で伝えられている民話の中にも（というより多くは）不思議な話が含まれている。その多くは口承伝承されてきたものだ。人々の口から口へと語り継がれてきた話の集積である。現在における都市伝説や学校の怪談などもその範疇に入る。「ねえ、聞いて聞いて」「こんな話を聞いたんだけど」という前振りから話は始まる。

不思議な話というテーマに対して、学生たちのほとんどはこれを「怪異体験について語る」と受け取った。学生が話した例をタイトルと話し出しのフレーズと共に、解説を加えながらいくつか挙げていこう。

① 「放課後」

- ・語り始めの言葉「これは、私が中学1年生の時の話です。」
- ・美術部に所属していた私は、放課後、活動のため4階の部室で過ごしていました。野球部やテニス部の活動を窓から見ながら絵を描いていました。ある日のこと、帰ろうとしたとき、「タタタタ」という足音が聞こえ、学ランを着たやけに小さな男の子が走っていったように見えました。次の日もその次の日も、「タタタタ」と走り去る音だけが聞こえました。

それから数日後、誰もいない放課後。トイレの大きな鏡を見た時、私の後ろに制服を着た背の高い女の子が立っていました。「え？」と振り向いたのですが、誰もいませんでした。私は怖くなりこのことを両親に話しました。両親もこの中学の卒業生だったのです。父は「え、男の子と女の子だった？」と聞き、母と顔を見合わせて二人とも黙ってしまいました。そして、その先の事は話してくれませんでした。

<解説>

このスピーチでは、まず「これは、私が中学1年生の時の話です。」という語り始めの言葉に注目したい。この導入の言葉は「昔々あるところに～」から始まる昔話の語り始めに匹敵する。これから物語が始まる的確なフレーズである。これまでのスピーチではこのような限定した話し方はなかった。あるパターンを用いることで語りやすくなることを示した。

次に、「タタタタ」というオノマトペが効果的であった。実際に話し手は男の子が走り去る様子を2回繰り返していた。繰り返しの効果も語りには重要な要素だ。加えて話の終わり方が見事であった。両親は何と言ったのだろう？と聞き手に考えさせる

余韻を残した。ジワッとした怖さを演出している。

② (タイトルはなし)

- ・語り始めの言葉「私が確か小学校3年生だった時の事です。」
- ・学校から帰ると私はよく近所の公園で友達と遊んでいました。当時流行っていたのは、誰か一人がガラスの人形を隠し、皆でそれを見つける遊びでした。ある日、ガラスの人形を隠す番が回ってきました。私は、砂場の近くの草の中に人形を隠しました。すぐに見つけれられてしまうと思ったのですが、誰も見つけれられず私の勝ちとなりました。人形をとりに隠し場所へ行って見たのですが、人形がありません。それから皆で探したのですが、人形はついに見つかりませんでした。その数日後、人形は少し離れた公園のカバの遊具の口でみつかりました。誰かが、落とし物としておいたのかもしれませんが、当時は怖い思いをした。今でも不思議です。

<解説>

このスピーチも「私が確か小学校3年生だった時の事です。」という定型の語り始めである。話としては子どもにしてみても不思議だったという顛末ではあるが、話し方が不思議さを際立たせるように、緩急と声の大小が絶妙で臨場感あふれるスピーチであった。

怪談は、話し方で面白さの度合いが変わる。何という事のないような内容でも話し方で伝わり方が変わることを学生たちが実感できた例である。

③ 「N家の5つの不思議」

- ・語り始めの言葉「私の家の5つの不思議の話をしてします。」
- ・私の家の庭には大きな銀木犀の木があります。スズメや椋鳥や鳩がやってきて巣を作っていたのですが、不思議なことにいつのまにかみんないなくなっていました。
- ・朝、「行ってきます」とドアノブに手をかけたら、血のヌメっとした感じがしました。何があったんだろう？と手をみると…。あの感触は忘れられません。
- ・夜、眠る時、屋根からイタチや鼠が追いかけてこをしていた音が聞こえていたのに、最近、静かになりみんないなくなっていました。鳥たちのように。不思議です。
- ・私の小学生の妹には変な趣味があります。夏、セミの抜け殻を集めることです。今年の夏休みの宿題は、セミの抜け殻だけでリースを作ろうとしたのですが抜け殻の数が集まらず、リースを作ることができませんでした。蝉もいなくなっていました。
- ・私はおなかがすくと、「今日はオムライスが食べたい」、「今日は魚が食べたい」と強く念じます。すると夕食のメニューが思う通りになるのです。母が凄いのか？私

の思いが強いのか？

<解説>

日常生活でふと感じたことを不思議と捉え、小スケッチタッチとしてまとめていた。このスピーチを聞くことで彼女の家の様子や生活が生き生きと活写されていたことに皆が気づいていた。長い話が考えられず、5つのショートストーリーにしたと言っていた。構成の工夫を評価したい。

④ 「夕方のバス停にて」

・語り始めの言葉「これは、私が小学4～5年くらいの時の話です。」

・私は塾へ週3回バスに乗って通っていましたが、その日もいつものように歩いているとまったく知らない車が私の横にきてスッと窓が開きました。そして「乗っていくか？」と知らないおじさんから声をかけられました。怖くて固まっていたのですが、丁度バスがやってきたので飛び乗りました。

<解説>

不思議な体験ではあるが、本当の意味で怖い出来事だ。だから彼女も忘れられないという。

話の怖さとゆっくりと時間をかけた話し方、言葉の選び方、声の出し方とトーンが素晴らしく完成度の高いスピーチであった。聞き手も力が入り前のめりになりながら聞いていた。

⑤ 「この夏、白い蝶に導かれて」

・語り始めの言葉「これからお話するのは、この夏の出来事です。旅行に行く姉を母と送っていった時の事です。」

・姉を旅行へと送った帰り際、母が急にパワースポットへ行きたいと言い出しました。近くの神社を調べたら、岡山県のサムハラ神社（アマミナカヌシを祀っている）が近いことがわかりましたのでそこへ行くことになったのです。母も私も初めて行く神社です。方向音痴な2人ですが、不思議なことに行ったこともない神社へカーナビなしでたどり着くことができました。神社で「お守りください。ありがとうございます」と祈っているうちに、モヤモヤしていた気持ちが納まり自然に涙があふれてきました。帰り道、白い蝶が車の前に来て、まるで道案内をするように導いてくれました。良い風が吹いてきて気持ちの良い一日でした。家に帰ると、久しぶりに伯母から電話がかかってきました。「パワースポットに行きたくなったんだけど、一緒に行かない？」と。私と母は顔を見合わせました。こんなこともあるのですね。

<解説>

これは、内容的にドラマチックでオチもあり、物語として完成度が高いスピーチで

あった。ビジュアルイメージが強く、会話が自然で話に引き込まれ、聞いた後の気持ち晴れやかになった。「この話を聞いてお参りに行きたくなった」という感想が多く寄せられた。言葉は気持ちを支配し伝播していく。

以上は一例であるが、この他学校や家の不思議について、教室の配置や家の間取りを紙に書き説明しながら話を進めていった学生が数人いた。これまでのスピーチではなかった準備の仕方である。リアクションペーパーには、「皆の不思議の話を聞くのがとても楽しい」「皆、スピーチが上手くなった」、「不思議の話を考えるのが楽しかった。もっとやってみたい」という積極的な取り組みの姿勢が現れていた。

「不思議な話」のスピーチで気づいた点を整理してみると以下の4点である。

- 1) テーマに興味を持ち積極的にスピーチについて考えた。(話しやすいテーマであった)
- 2) 聞き手の存在を意識してどうすればより聞いてくれるのかを考え工夫した。
- 3) 話し方や言葉使いに気を配った。(音声言語表現技術を意識して使った)
- 4) 物語は話しやすく、聞きやすい。(ストーリーの重要性)
- 5) 何かを語るということは、自分を語ることであるという事に気づいた。

学生たちの思考を追ってみよう。

学生たちは「不思議な話」を考えることが楽しかった。

→時間をかけてしっかり考えた話を聞いてもらいたいと思った。

→それには唯話すのではなく何か聞いてもらえるような工夫が必要だと思うようになった。

→授業で学んだ「音声言語表現技術」を生かそうと思った。

→具体的に話し方の工夫や話し始めや(いつも戸惑ってしまう)終わり方も工夫をしようと思った。

→メモは自分が話しやすいサイズにして、絵や地図や図を描いてみた。準備は整った。

→練習をした。

→そして発表の時を迎えた。

→練習のように話すことができています。

→皆が真剣に話を聞いてくれる。

→反応が良いと話しやすい。生き生きと楽しく話すことができた。

→自信を持てた。スピーチは怖くないと思った。

これは一つのモデルケースであるが、このような思考と結果を得た学生が多かったことは事実である。その証左として最後の「お勧め本」のスピーチが位置づけられる。こうして「アナウンス入門」2019年後期の12人は教室全体で音声言語表現のレベルを上げた。

6 おわりに

パブリックスピーキングは、場に慣れ、経験値を挙げていくことが上達につながる。目に見えて成長のあとが見えるのが大きな特徴でもある。今回の「アナウンス入門」2019 年後期の授業は、12 人の見事な相互作用で全員のレベルアップが見られた非常に良い例だった。スピーチのテーマにより学生の興味がこれほど変化することかとも驚いてもいる。「怪異体験」は話したくなるという人の性もあるだろうが、学生たちは楽しそうに生き生きとスピーチに取り組み、その姿はじつに頼もしくもあった。

スピーチ体験を積むことで、知らずうちに語りの定型を学んでいった。同時に、自分を語ることはどういうことかについても彼女たちの理解が進んだ。自己を語ると構えなくても、「不思議な話」を語ることも自分自身を語ることだという事に気がついた。何を語っても自分を語ることに繋がるのが分かれば、おそらく自己紹介に悩む必要はないであろう。

今回は上手くいった例であったがいつもこのように上手くいく保証はない。スピーチのテーマとして何が相応しいかを問い、学びへの応用力をどのように付けていくのかを考える必要がある。スピーチの楽しさと難しさは両輪として肌で理解していかなければならないと強く感じている。今回の 12 人には期待を込め、さらに音声言語表現を伸ばして欲しいと切に願っている。

最後に最終試験で学生たちが紹介した「私のお勧め本」の一覧を記載して、このノートを閉じることにする。

【アナウンス入門 2019 年度前期 お勧め本一覧】

本のタイトル・発表タイトル	著者名	出版社	発行年
『珈琲店タレーランの事件簿』 「文字だからこそ面白いミステリー」	岡崎琢磨	宝島社	2015
『君の臍臓を食べたい』 「友情や恋愛では表せない二人の関係」	住野よる	双葉社	2017
『ようこそ地球さん』 「星新一ショートショートの世界」	星 新一	新著文庫	1972
『星の王子さま』 「何度も読み返したくなる本」	サン・デグジュベリ	岩波書店	2000

『最後の医者は桜を見上げて君を想う』 「家で読むことをオススメします」	二宮敦人	TO 文庫	2016
『13 か月と 13 週と 13 日と満月の夜』 「ノンストップストーリー」	アレックス・シアラー	求龍堂	2003
『アンネの日記』 「背景のナチス」	アンネ・フランク 深野眞理子・訳	文藝春秋	1994
『八月の終わりはきっと世界の終わりに似ている』 「ペースメーカー」	天沢夏月	メディアワークス 文庫 (KADOKAWA)	2017
『夜は短し歩けよ乙女』 「読むと 1 年通り過ぎる」	森見登美彦	角川文庫	2008
『化物語』 「幅広い世界観と作者の想像力の豊かさ」	西尾維新	講談社 BOX 文庫	2006
『西の魔女が死んだ』 「ホッコリ泣ける物語」	梨木香歩	新潮文庫	2001
『ディズニーおもてなしの神様が教えてくれたこと』 「夢の国に行きたくなる」	鎌田洋	SB クリエイティブ	2014
『1 分で話せ』 「人前で話すにあたって」	伊藤羊一	SB Creative	2018
『五千回の生死』 「本の醍醐味が味わえる一冊」	宮本 輝	新潮文庫	1990
『アクセス』 「欲がうみだすモノは？」	誉田哲也	新潮文庫	2012
『おばけ桃が行く』 「理想の人生」	ロアルド・ダール 柳瀬尚紀・訳	評論社	2005
『学年ビリのギャルが 1 年で偏差値を 40 上げて慶応大学に現役合格した話』 「可能に変える」	坪田信貴	KADOKAWA	2015

『僕はロボットごしの君に恋をする』 「読む前と読んだあとでタイトルの意味が変わる」	山田悠介	河出書房新社	2017
『永遠の0』 「生きること」	百田尚樹	講談社	2006
『カラフル』 「客観的に見て行動する」	森 絵都	フォア文庫 理論社	2010

*『 』は本のタイトル、「 」が自分の発表のタイトル。(タイトルが大切だという事は理解できたが、考えることは難しかったようだ)

【アナウンス入門 2019 年度後期 私のお勧め本一覧】

タイトル	著者名	出版社	発行年
ブロードキャスト	湊かなえ	KADOKAWA	2018
自分を休ませる練習	矢作直樹	文響社	2017
くちびるに歌を	中田永一	小学館	2013
人魚の眠る家	東野圭吾	幻冬舎文庫	2018
おこだてませんように	くすのきしげのり	小学館	2008
凶南の翼	小野不由美	講談社	1996
日輪 春は馬車に乗って 他八編	横光利一	岩波文庫	1981
西の魔女が死んだ	梨木香歩	新潮社	2001
失われる物語	乙一	角川書店	2003
浮雲心霊奇譚 赤眼の理	神永 学	集英社	2017
金持ち父さん貧乏父さん	ロバート・キヨサキ	筑摩書房	2013
モモ	ミヒヤエル・エンデ	岩波書店	2005
夢をかなえるゾウ	小野敬也	飛鳥新社	2007

*2019 年後期は、本のタイトルのみで発表のタイトルはない。